



Title	清華簡の字迹とその関係性 : 第1類A・B・C種を中心に
Author(s)	福田, 哲之
Citation	中国研究集刊. 2018, 64, p. 38-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72896
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

清華簡の字迹とその関係性

—第Ⅰ類A・B・C種を中心に—

福田 哲之

一、清華簡（壹—柒）の字迹分類

筆者は前稿において清華簡の第一分冊（壹）から第六分冊（陸）を対象に、書法様式と判別字との二つの基軸による字迹分類を試み、若干の考察を加えた^{（注）}。その後、新たに公表された第七分冊（柒）所収の『子犯』『晋文公』『趙簡子』『越公』の四篇について、二つの基軸にもとづく分析を行なった結果、これらはすべて前稿で示した分類の第Ⅰ類B種に属することが明らかとなった。清華簡（壹—柒）の字迹分類と形制との関連をあらためて整理すると「別表Ⅰ」のごとくである。

前稿においては、二つの基軸とそれにもとづく字迹の

類別を中心に論じたため、字迹相互の関係性については十分に論及できなかった。本稿では、第七分冊（柒）所収の諸篇によって新たに得られた知見も踏まえながら、第Ⅰ類のA種の字迹およびA・B・C三種の相互関係を中心に考察を加えてみたい。なお本稿における清華簡の篇名は、便宜上、各分冊所収「字形表」の略称に従う。

二、A種の字迹

A種は、字迹（判別字）・簡長（四十四・七—四十五・三センチ）・簡背数字（本文同筆）という三点の共通性により、第Ⅰ類の他種と区別される。ただし留意すべきは、『祭公』と『祭公』以外のA種諸篇との間に、

書法風格上の相違が認められ、その原因を書手の違いとみる説と、同一書手における差異とみる説とが対立している点である^(注2)。本章では、A種における字迹の關係性という観点から、あらためてこの問題を取り上げてみたい。なお以下の論述にあたつては、便宜上、『祭公』以外のA種諸篇の書風を書風 α 、『祭公』の書風を書風 β と表記する。

判別字の分析からも知られるように、書風 α の諸篇と書風 β の『祭公』との間には、他種に比して顕著な形体上の共通性が認められる^(注3)。ただし、同時に両者の間には、いくつかの注目すべき形体上の相違点も見いだされる。その具体例として、まず判別字の中から「𠂔

〔表1〕 A種における1209「𠂔(𠂔)」字^(注4)の形体

β	α		書風
			字形 竹簡編號
𠂔 全型	𠂔 全型	𠂔 全型	類型
2 祭公 2	1 芮良夫 1	19 赤瞻 1・金滕 1・三壽 17	用例数
		内 訳 各篇用例数	

〔𠂔〕字を取り上げよう〔表1〕参照。

「𠂔(𠂔)」は上部「尔」の形体から、全型・全型・全型の三種に分類される。書風 α は二十例のうち全型が十九例を占め、全型が一例見える。全型は全型の「八」の左払いを、下部左側の「𠂔」(昏)の第一画(左払い)との共有により省略した簡体であり、書風 α の書手は全型を主とする書写習慣をもち、『芮良夫』の一例は、例外的にもとの繁体が出現したものと見なされる。一方、書風 β の全型は、 α の二例とは字形の系列を異にしており、書写習慣の異なる書手による可能性が指摘される。次に判別字以外の用例から「和」を取り上げる(表2)参照。

書風 α は、「禾」の横画の左上に「口」が位置して「禾」の第一画と接続する独自の形体をもつ。書風 β の

〔表2〕 A種における208「和」字の形体

β	α	書風
		字形 竹簡編號
1 祭公 1	9 耆夜 1・芮良夫 5・三壽 3	用例数
		内 訳 各篇用例数

『祭公』は用例が一例のみであるため、書風 α と同じ書手が底本の影響などによって例外的に異なる字形を用いた可能性も考慮されるが、書風 α では複数の篇で一貫して同一の字形が用いられていることから、その可能性は低いのではないかと思われる。

最後にやや複雑な様相を示す例として「我」字を取り上げる（「表3」参照）。

書風 α には①～⑤の五種の形体が見え、用例数では①②が中心的な位置を占めている。このような多様性が生じた原因としては、底本の影響も考慮されるが、「表3」の字形欄に掲げたように、『尹誥』では同じ竹簡（簡2）

〔表3〕 A種における「我」字の形体

β	α					書風
	⑤	④	③	②	①	字形竹簡編号
〔別掲〕	 琴舞 16	 尹誥 02	 芮良夫 25	 尹誥 02	 尹誥 02	用例数
12	2	1	4	11	16	内 訳 各篇用例数
祭公 12	琴舞 1・芮良夫 1	尹誥 1	芮良夫 4	尹至 1・尹誥 1・金縢 5・説命 2・赤鸞 1・三壽 1	尹至 2・尹誥 2・善夜 1・金縢 2・三壽 2・説命 2・赤鸞 5	

に①②④の三種が用いられており、書手が習得している複数の形体を任意に書き分けたものと思われる。五種の形体は①を基本とし、第一画（短豎）がほぼ垂直に下筆され、第二画の左上から右下への斜めの筆画がおよそ三十度の傾斜角をもつ点で、顕著な共通性を示している。

一方、書風 β の『祭公』は書風 α の⑤の形体に近く、A種における関連性が認められるが、同時に第一画（短豎）の下部をやや左に曲げ、第二画および第三画をL型に作る例が見え、書風 α とは明瞭な相違を示している（「表3別掲」参照）。

さらに第二・三画の形体に注目して『祭公』における「我」字の用例を通覧すると、簡1から簡11までは直角に近いL型であるのに対し、簡12からは角度が緩んで曲線に近づき、簡19-3・簡19-4では書風 α に近い斜線となり、最後の簡21ではまたはじめのL型に近づくという複雑な変化が認められる。簡1から簡11までのL型が末

〔表3別掲〕 『祭公』における「我」字の形体変化

	01		02		05		07		11		12
	13		19-1		19-2		19-3		19-4		21

算用数字は竹簡編号

尾の簡21でも出現していることから、『祭公』の書手は
 L型の書写習慣をもち、簡12以降の変化は書風 α の形体
 の影響をうけたものと考えられる。

三、A種の句読符号

本章では前章における「我」字との関連から、本文に
 付けられた句読符号に注目してみたい(注5)。A種におけ
 る句読符号は『尹誥』以外の諸篇に付されており(注6)、
 書風 α (『祭公』以外)には一型の短横、書風 β (『祭
 公』)には一型の短横とともにレ型の墨鉤が用いられて
 いる。

注目されるのは、『祭公』における二つの句読符号の
 分布に一定の傾向性が認められる点である(「表4」参
 照)。すなわち簡1から簡11まではレ型の墨鉤のみが用
 いられるのに対し、簡12以降では一型の短横が併用さ

【表4】『祭公』における句読符号の分布

竹簡 編号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
レ型			3	4	5	4	5	4	4	4	4	4	2	0	1	0	4	0	1	0	1
一型	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	3	1	0	2	1	4	0
保留	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0

「保留」は残缺などにより判別し難いもの

れ、そちらに比重が移っている。ただし、末尾の簡21で
 も墨鉤と短横とがそれぞれ一例ずつ見えることから、
 『祭公』の書手は句読符号にレ型の墨鉤を用いる書写習
 慣をもち、簡12以降の短横への転換は書風 α の句読符号
 の影響をうけたものと考えられる。

ここで指摘したいのは、前章で分析を加えた『祭公』
 における「我」字の形体の変化と先に見た句読符号の変
 化との間に明瞭な共通性が認められる点である。すなわ
 ち簡1から中間の簡11あたりまでは書風 β の書手自身の
 書写習慣にしたがっていたのに対し、簡12以降になると
 書風 α の書手にあわせた字形や符号に変化する傾向が認
 められるのである。こうした影響関係を踏まえれば、書
 風 α (『祭公』以外)と書風 β (『祭公』)とは書手を異
 にし(注7)、しかも『祭公』の句読符号は本文と同じ書手
 によって、本文の書写と同時に並行的に付された可能性が
 高いであろう。

これまでの分析結果を踏まえれば、A種のうち書風 α
 の諸篇(『尹至』『尹誥』『耆夜』『金縢』『說命』『琴舞』
 『芮良夫』『赤谿』『三壽』)は同じ書手によって書写さ
 れ、一方、書風 β の『祭公』は別の書手によって書写さ
 れたと見なされる。書風 β の書手は書風 α の書手の文字

や符号の形体に意図的に倣おうとした形跡がうかがわれ、『祭公』の書写は、A種の他の諸篇の字形や符号に合わせる形で行なわれたと推測される。

四、A・B・C三種の関係性

本章では、前章までのA種の分析を踏まえて、A・B・C三種の関係性について、字迹・形制（簡長・簡背数字）・内容の三点から考察を加えてみたい。

まず字迹について指摘されるのは、三種のうちとくにBとCとの間に緊密な共通性が認められる点である。これについてはすでに前稿で提示した判別字の分析によつて明らかであるが^{（注8）}、ここでは第二章との関連から、あらためて「𠂔（𠂔）」字を取り上げる。用例にもとづき字形分布を整理すると以下のごとくである（「表5-1-2」参照）。

BとCは「𠂔」および「𠂔」の二つの形体を併用し、さらに「𠂔」字においては、全型の共有関係が認められる。こうした状況を踏まえれば、B種の書手とC種の書手とは、共通の学書基盤をもつなど、きわめて近い関係にあると見られる。

次に、内容と形制（簡長・簡背数字）との関連につい

て見ていこう（「表6」参照）。
まず形制をみると、A種の諸篇はいずれも簡長約四十五センチの竹簡に書写されており、本文と同筆の簡背数字が付されている。

【表5-1】1209「𠂔（𠂔）」字の字形分布

I													類				
C			B						A				種				
陸	伍	伍	柒	柒	柒	陸	陸	壹	壹	參	伍	參	壹	冊			
管仲	甯門	湯丘	越公	趙簡子	子犯	太伯甲乙	孺子	皇門	祭公	芮良夫	三壽	赤賂	金滕	篇名			
0	0	1	6	2	5	8	2	2	0	0	0	0	0	畱			
8	3	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		𠂔		
10	4	4	1	3	8	0	0	0	0	1	0	0	0			𠂔	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17	1	1				𠂔
0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0				

〔表5-2〕 1209 「𠄎」字の字形例

I		
C	B	A
 管仲 08	 湯丘 15	 金騰 10
 管仲 24	 湯丘 04	 赤谿 13
	 湯丘 11	 三壽 27
	 晉門 18	 丙良夫 03
	 晉門 05	 祭公 01
	 趙簡子 05	 皇門 02
	 趙簡子 06	 孺子 03
	 越公 45	 太伯甲 12
	 越公 52	 子犯 14
	 子犯 09	

B種は、『皇門』『孺子』『太伯甲乙』『子犯』『晋文公』の五篇がA種と同じ簡長約四十五センチの竹簡、『子儀』『趙簡子』『越公』の三篇が、それより三センチ短い簡長約四十二センチの竹簡に書写されており、『皇門』のみに本文とは別筆で簡背数字が付されている。

C種は、『算表』が簡長約四十四センチの竹簡、『湯丘』『晋門』『管仲』が簡長約四十四―四十五センチの竹簡に書写されており、いずれも簡背数字は付されていない。

内容との関連から注目されるのは、A種はすべて夏殷

周三代における王やその臣下にかかわる内容をもつ点である。上述のごとくA種にはすべて本文と同筆の簡背数字が付されており、簡長とともに顕著な共通性を示している。第二章で見た『祭公』の字迹分析の結果も、こうした状況と軌を一にするものであり、A種には字迹・形制・内容の諸点において統括的な意図がうかがわれる。一方、B種は主として春秋時代の各国の故事で構成されるが、『皇門』のみが西周期に属している。『皇門』は『逸周書』皇門篇とほぼ同じ内容を持ち、群臣望族に対する周公の訓戒を記したものであり、内容面ではむしろA種との関係が深い。

この点から注意されるのは、B種では上述のごとく『皇門』のみに別筆で簡背数字が付されていることである。この別筆はA種の二人の書手（書風 α ・書風 β ）とも異なるようであり、別人によって附加された可能性が高いが、あるいはA種への編入が意図されていた可能性も考慮されるのではないだろうか。仮に『皇門』の簡背数字についてこのような推測が成り立つとすれば、A種と同じ簡長をもつ竹簡の共有も、B種とA種とのつながりを示唆するものとして注目しておく必要があるだろう。

ただし、B種諸篇のうちA種と同じ簡長をもつ『孺子』『太伯』『子犯』『晋文公』とB種独自の簡長をもつ

『子儀』『趙簡子』『越公』とは、いずれも春秋時代の諸国故事という点で共通した性格をもち、なぜ異なる簡長の竹簡が用いられたのかについては、現時点では明確にし得ない。

C種は、『算表』と『湯丘』『甯門』『管仲』との間で簡長が異なるが、簡寛(幅)の面でも、『湯丘』等の諸篇が〇・六センチであるのに対し、『算表』は二倍の一・二センチであり、文献の性格と簡長・簡寛との間に明瞭な対応関係が認められる。

『湯丘』と『甯門』とはともに湯と伊尹の故事で同冊関係にあり、内容面ではA種とも関連が深

〔表6〕A・B・C種各篇の内容と形制

種		A		B		C	
冊	篇名	内容					
参	赤牖	湯・伊尹故事(滅夏前)	夏・殷	壹	皇門	肆	算表
壹	尹至	湯・伊尹故事(滅夏の経緯)	夏・殷	陸	孺子	伍	湯丘
壹	尹誥	湯・伊尹故事(滅夏後)	殷	陸	太伯甲乙	伍	甯門
参	説命上中下	殷高宗(武丁)夢に説を得る	殷	柒	子犯	陸	管仲
伍	三壽	殷高宗(武丁)と三壽との問答	殷	柒	晋文公	陸	同冊
壹	耆夜	武王・周公旦 飲至儀礼の詠歌	西周	陸	秦穆公	陸	
壹	金縢	武王の有疾と周公旦・成王の行為	西周	陸	秦穆公	陸	
参	琴舞	多士に対する周公の告誡の詩	西周	陸	秦穆公	陸	
参	芮良夫	厲王に対する芮良夫の訓誡の辞	西周	陸	秦穆公	陸	
壹	祭公	穆王に対する祭公某父の訓誡	西周	陸	秦穆公	陸	
壹	祭公	周公の群臣望族への訓誡	西周	陸	秦穆公	陸	
壹	祭公	鄭の武公夫人武姜が莊公に告げた規誡	春秋(鄭)	陸	秦穆公	陸	
壹	祭公	鄭の太伯が臨終の際に文公に告げた規誡	春秋(鄭)	陸	秦穆公	陸	
壹	祭公	秦(穆公)に流亡時の重耳の故事	春秋(晋)	陸	秦穆公	陸	
壹	祭公	晋帰国後の重耳(文公)の故事	春秋(晋)	陸	秦穆公	陸	
壹	祭公	秦穆公が楚に子儀を送還する際の問答	春秋(秦楚)	陸	秦穆公	陸	
壹	祭公	趙簡子に対する進諫と問答	春秋(晋)	陸	秦穆公	陸	
壹	祭公	趙簡子に対する進諫と問答	春秋(晋)	陸	秦穆公	陸	
壹	祭公	越公句踐の滅呉にかかわる歴史故事	春秋(越)	陸	秦穆公	陸	
壹	祭公	計数表	春秋(越)	陸	秦穆公	陸	
壹	祭公	湯と伊尹との問答	春秋(齊)	陸	秦穆公	陸	
壹	祭公	湯と小臣(伊尹)との問答	春秋(齊)	陸	秦穆公	陸	
壹	祭公	齊桓公と管仲との問答	春秋(齊)	陸	秦穆公	陸	

いが、『管仲』との関係からすれば、君主とすぐれた臣下との問答という共通主題が見いだされ、A種とは別の枠組みによって選定された可能性も考慮される。

結 語

以上、本稿では清華簡（壹―柒）の字迹分類にもとづき、第I類A・B・C種の字迹とその関係性について、初步的な検討を加えた。

従来、清華簡の特色の一つとして、『尚書』類の文献が含まれる点が注目されており、とくにA種はその中心的な位置を占めている。もとより夏殷周三代の王とその臣下にかかわる内容という点において、これらを『尚書』類と呼ぶことに問題はない。しかし、『尚書』の本質が周書の五誥に代表される王者の言説の記録に求められるとすれば、A種の諸篇は少しく性質を異にし、むしろすぐれた臣下による王への助言や諫進という面に重点が置かれているように見受けられる^{注9}。その点からすれば、B種やC種の春秋期における諸国故事にも、この主題は通底する。A種の分析をおしてうかがわれた統括性は、戦国期において『尚書』類に属する文献を材料としながら、さまざまな整理作業が行われていたことを示

唆するのではないだろうか。

いずれにしても、本稿で提示した諸点はあくまでも現時点における仮説にすぎず、今後、続刊の公表をまつてさらなる検証と考察を加えていきたい。

注

- (1) 拙稿「清華簡（壹）（陸）の字迹分類」〔湯淺邦弘編『清華簡研究』汲古書院、二〇一七年、第一五―三五頁〕
- (2) 先行研究における『祭公』の分類については、拙稿「清華簡（壹）（陸）の字迹分類」（前掲注1）参照。
- (3) 拙稿「清華簡（壹）（陸）の字迹分類」（前掲注1、第二二―二三頁）参照。
- (4) 以下、各表において検討の対象とする文字の上に付した算用数字は各分冊所収の「字形表」に付された共通番号であり、『説文』の巻次と部序を示す。
- (5) 清華簡の標点符号については、賈連翔『戦国竹書形制及相關問題研究―以清華大学藏戦国竹簡为中心』（中西書局、二〇一五年、第一五八―一六一頁）、肖芸曉「書手的習慣―清華簡標点符号觀察」（二〇一七年度国際學術シンポジウム Multi-Disciplinary Approachによる新出土資料の総合的研究 學術報告、二〇一八年三月十七日、日本女子大学）参照。

(6) 『尹誥』に句読符号が付されなかった理由については明確にしたいが、全四簡という短篇であるため、句読符号を必要としなかった可能性が考慮される。

(7) 賈連翔氏は、書法風格上の共通性から『祭公』と『厚父』とを同じ書手とみており(『戦国竹書形制及相關問題研究——以清華大學藏戰國竹簡為中心』前掲注5、第一六九頁)、肖芸曉氏(『書手的習慣——清華簡標点符号觀察』前掲注5)は、『祭公』と同様のL型(本稿ではレ型)の符号が『厚父』にも見えることから、賈氏の見解を支持している。

(8) 前稿で提示した十一の判別字のうち、BとCの間には「於」「乃」「人」「𠂔」「四」「五」の六字に固有の近似性が認められ、両者の緊密な関係性が知られる(拙稿「清華簡(壹)〜(陸)の字迹分類」(前掲注1、第三〇・三三頁)参照。

(9) この点については、拙稿「『尹誥』の思想的意義」(湯浅邦弘編『清華簡研究』汲古書院、二〇一七年、第一一三—一三三頁)において言及したことがある。

〔附記〕本稿は、平成二十九年七月十六日に大阪大学で開催された中国出土文献研究会公開講演会における筆者の講演「清華大學藏戰國竹簡(壹—柒)の字迹分類」にもとづき、その後の知見を加えて執筆したものであり、JSPS科研費17K02730の助成による研究成果の一部である。

【別表Ⅰ】 清華簡（壹—柒）の字迹分類

Ⅰ											類 種									
C				B					A		冊 篇 名									
陸 管仲	伍 甯門	伍 湯丘	肆 算表	柒 越公	柒 趙簡子	陸 子儀	柒 晉文公	陸 太伯 甲乙	陸 孺子	壹 皇門	伍 三壽	參 赤谿	參 芮良夫	參 琴舞	參 說命 上中下	壹 祭公	壹 金縢	壹 耆夜	壹 尹誥	壹 尹至
30	21	19	21	75	11	20	08	15	14/12	13	28	15	28	17	07/07/10	21	14	14	04	05
44.2—44.8	44.4—44.5	44.3—44.6	43.4—43.7	41.4—41.8	41.5—41.6	41.5—41.7	45.2	45.0—45.1	44.9—45.1	45.0—45.4	44.9—45.2	44.9—45.2	44.8—45.1	44.7—45.1	44.7—45.3	44.9—45.1	45.0—45.1	45.0—45.2	45.0—45.1	44.9—45.0
無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	有（別筆）	有（同筆）	有（同筆）	有（同筆）	有（同筆）	有（同筆）	有（同筆）	有（同筆）	有（同筆）	有（同筆）	有（同筆）
三道	三道	三道	三道	三道	三道	三道	三道	三道	三道	三道	三道	三道	三道	三道	三道	三道	三道	三道	三道	三道
				「越公其事」篇尾 正文と連続（同筆）※篇題？			「子輒子余」簡1背面（同筆？）				「殷之高宗問於三壽」末尾簡28背面上部（同筆）									

Ⅲ	Ⅱ		Ⅰ								
			L	K	J	I	H	G	F	E	D
壹	參	參	陸	伍	伍	伍	肆	肆	貳	壹	壹
保訓	祝	良	子	命	封	厚	別	筮	繫	楚	程
	辭	臣	產	訓	許	父	卦	法	年	居	寤
11	05	11	29	15	06	13	08	63	138	16	09
28.5—28.6	32.7—32.8	32.6—32.8	44.9—45.0	50.6（殘簡最長）	43.9	43.7—44.2	15.8—16.0	34.8—35.1	44.4—45.1	47.4—47.6	44.5
無	無	無	無	有（同筆）	有（同筆？）	有（同筆？）	無	有（同筆）	有（同筆）	無	無
二道	三道	三道	三道	三道	三道	三道	二道	三道	三道	三道	三道
					「封許之命」末尾簡9背面下部（別筆）	「厚父」末尾簡13背面下部（別筆）					